

1. 認知症サポーター100万人キャラバン

「痴呆」から「認知症」へ

尊厳をもって最期まで自分らしくありたい。これは誰もが望むことです。この願いを阻み、深刻な問題になっているのが「認知症」です。認知症は、いまや老後の最大の不安となり、超高齢社会を迎えようとする日本にとって最重要課題の一つとなっています。

2004年12月、「痴呆」の呼び名が「認知症」へ変更されました。この背景には「痴呆」は侮蔑的で、高齢者の尊厳を欠く表現であること、その実態を正確に表していないこと、早期発見・早期診断等の支障となっていること、それらが認知症対策の取組みへの障害ともなっているなどの現状がありました。

認知症は誰にでも起こりうる脳の病気に起因するものです。85歳以上では4人に1人にその症状があるといわれ、今後、高齢化に伴い、認知症高齢者数も急増することが予想されています。※

※ 認知症サポーター養成講座標準テキスト／キャラバン・メイト養成研修テキストより引用

「認知症を知り地域をつくる10カ年」と 「認知症サポーター100万人キャラバン」

2004年の呼称変更を契機として、みんなで認知症の人とその家族を支え、誰もが暮らしやすい地域をつくっていく運動「認知症を知り地域をつくる10カ年」キャンペーンが始まりました。このキャンペーンは、認知症を理解し、認知症の人や家族を温かく見守り、支援する「認知症サポーター」を1人でも増やし、認知症になっても安心して暮らせる町づくりを市民の手で展開していくものです。※2

※2 キャラバン・メイト養成研修テキストより引用



キャラバン・メイトの役割

自治体事務局等と協働して地域や職域・学校などで「認知症サポーター」を養成する講師役を「キャラバン・メイト」と言います。

平成17年度の事業開始時には、5年間に全国で100万人のサポーターを養成することを目指していましたが、その目標は事業開始から約4年後、平成21年5月末に達成され、現在は、厚生労働省により、平成26年度までに認知症サポーターを400万人誕生させるという目標が掲げられています。

平成24年12月末現在、認知症サポーター数は390万人を達成しています。

認知症の人と認知症サポーターが約1対1程度の数になれば、サポーターがそれぞれの立場で役割を果たす町づくりが可能になると考えられます。

また、キャラバン・メイトは、「認知症になっても安心して暮らせる町づくり」に向けて、関係機関・組織・団体等へのはたらきかけ、協力・連携体制づくり、ネットワーク化を推進し、地域のリーダー役を担うことも期待されています。※2

※2 キャラバン・メイト養成研修テキストより引用

認知症サポーターの役割

「認知症サポーター」は、認知症について正しく理解し、認知症の人やその家族を温かく見守る応援者です。そのうえで自分のできる範囲で活動してもらいます。友人や家族に学んだ知識を伝える、認知症になった人や家族の気持ちを理解するよう努める、ということも認知症サポーターの活動のひとつです。

また、商店・交通機関等、住民と身近に接する職場で働く人であれば、業務のなかで「認知症サポーター養成講座」で得た知識を活かす場面も多いと考えられます。

認知症サポーターには「認知症の人を支援します」という意思を示す「目印」であるブレスレット「オレンジリング」が渡されます。※3

※3 認知症サポーターキャラバンの手引きより引用

なぜ「オレンジリング」なのか

「柿色」をしたオレンジリングは、認知症サポーターの目印です。江戸時代の陶工・酒井田柿右衛門が夕日に映える柿の実の色からインスピレーションを得て作り出した赤絵磁器は、ヨーロッパにも輸出され世界的な名声を誇りますが、同じく“日本初”の「認知症サポーターキャラバン」のオレンジリングが、世界のいたるところで「認知症サポーター」の証として認められればとの思いからつくられました。

なお温かさを感じさせるこの色は、「手助けします」という意味をもつとされています。※3

「認知症サポーターキャラバン」のマスコット

「ロバ隊長」は、「認知症サポーターキャラバン」のマスコットです。

認知症サポーターの「キャラバン」(隊商)の隊長として、「認知症になっても安心して暮らせる町づくり」への道のりの先頭を歩いています。ロバのように急がず、しかし一歩一歩着実に、キャラバンも進んでいきます。

※3

※3 認知症サポーターキャラバンの手引きより引用



ロバ隊長